

『画廊に咲く7つの向日葵』

リサイタル講座

第6公演

2021年9月22日(水)

会場 前田ホールホール
入場料無料

開場17:30

開演18:00

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。・出演者への面会はできません。花束・プレゼントなどをご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。



1. 澁江 ワタル(Trumpet)

アルカディ・ネステロフ/トランペット ハ短調



5. 黒澤 望愛(Saxophone)

アレクサンドル・グラズノフ/アルトサクソフォンと
弦楽オーケストラのための協奏曲



2. 中村 彩香(Jazz Piano)

中村彩香/
回想、陽が当たる庭、
さんぼ道、おしゃべりな小鳥たち



6. 谷田 果奈美(Euphonium)

ウラジミール・コスマ/ユーフォニアム協奏曲
より 1 楽章



3. 中山 亜実(Trumpet)

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
/トランペット協奏曲 変ホ長調

~休憩~



7. 船木 彩香(Saxophone)

フェルナンド・デュクリュック
/ソナタ嬰ハ調



4. 森 奈那子(Percussion)

ミシェル・カルス/
4つのインヴェンションより 1.3.4 楽章

～ご挨拶～

本日は学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル」においでいただき御礼申し上げます。洗足学園音楽大学のメインステージの前田ホールで、大学4年間の集大成の演奏を披露するために選抜学生42名による6回のジョイント・リサイタルを開催する運びとなりました。各出演日の学生がそれぞれの思いでプログラムや副題を決め、この日の為に準備をしてまいりました。専門コースの違いはあっても大きな会場で初めてのリサイタルを行う「責任と研究成果」を聴いていただければ大変な喜びとなります。出演学生が、その独自の構成と演出を競い、教員の講評審査を受けてこの舞台から巣立ち、現在は欧米各地に留学しコンクール入賞者や、国内外オーケストラ、教員、プレーヤーとして活躍する卒業生も多く、本学の講師として活躍するものもいるという嬉しい実績を持っております。この演奏会を基に日本の、そして世界の楽壇へと羽ばたく彼らに応援の拍手をお願いいたします。

学内リサイタル講座 教授 渡部 亨

本日は学内リサイタル講座「第5回 ジョイント・リサイタル」にご来場くださり、誠にありがとうございます。昨年度から演奏会を開催する事が大変難しい情勢となっておりますが、こうしてお客様をお呼びして音楽をお届け出来ること、大変嬉しく存じます。本日出演する演奏者一同、この演奏会を開催出来る事を有難く感じながら本日の為に準備して参りました。

本日の演奏会の副題は「画廊に咲く7つの向日葵」となっております。画家のゴッホが描いた「ひまわり」は有名な作品ですが、彼の花瓶に挿された向日葵を描いた作品が7つあることはご存知でしょうか。その7つの作品は、同じ向日葵を描いていても、すべて作品の色づかいが違ってきます。彼が描いた7つの「ひまわり」のように、出演者7人、それぞれ違った色彩の音楽をお楽しみ頂きますと幸いです。最後になりますが、リサイタル開催にあたり御尽力頂きました渡部亨先生をはじめ、関わって下さった全ての方に心より御礼申し上げます。

第5回公演 学生代表 船木 彩香

～プログラム～

1. 澁江 ワタル (Trumpet) Piano 小松 祥子 アルカディ・ネステロフ / トランペット ハ短調

アルカディ・ネステロフは旧ソビエト連邦(現在のロシア)出身の作曲家である。

出身国をロシアと書かなかったのにはネステロフが存命していた1918年から1999年という期間は、ソビエト連邦が国として成立していた期間とほとんど同じなのである。その為、今回はあえて旧ソビエト連邦と書かせて頂いた。

この曲の冒頭はピアノが奏でる旋律の提示に対してトランペットも同じ旋律を奏でていくデュエットのような形式で音楽が展開されていく。曲全体を通して現代のロシアの踊りやお祭りを彷彿させるかのような伴奏のリズム、トランペットの旋律が特徴的である。

曲の最後は壮大かつ華やかなクライマックスを迎え音楽は幕を閉じる。

～プロフィール～

東京都出身。東海大学付属高輪台高等学校卒業。

これまでにトランペット、室内楽共に古田俊博氏に師事。

2. 中村 彩香 (Jazz Piano) Bass 武田 優亮、Trumpet 椎名 偉吹 中村彩香／回想、陽が当たる庭、さんぼ道、おしゃべりな小鳥たち

今回はミニアルバムのようなプログラムです。4曲を通して何かイメージが伝われば嬉しいです。ある夏の日、ふと思い出す懐かしい祖母の家。色とりどりの花が陽の光を浴び咲き乱れ、山からはうぐいすの音が聞こえる庭先。お気に入りの椅子に座りコーヒーを飲みながら話す姿、大好きな花を手入れする姿、見送ってくれる姿、そんな沢山の懐かしい瞬間を回想しながらつくりました。

～プロフィール～

2歳から電子オルガン、20歳からジャズピアノを始め電子オルガンを渡辺睦樹、ジャズピアノを片倉真由子氏に師事。ソロ演奏他NHK交響楽団第1ヴァイオリン奏者高井敏弘氏と共演、バンドネオン奏者小松亮太氏と共演、東京シティ・バレエ団と共演をはたす。第5回アマービレ電子オルガンコンテスト課題曲一般部門金賞、エレクトーンフェスティバル2017銀賞、第19回九州音楽コンクール金賞並びに審査員特別賞、同コンクール「受賞記念コンサート」でグランプリに次ぐローランド賞を受賞。

3. 中山 亜実 (Trumpet) Piano 小松 祥子 フランツ・ヨーゼフ・ハイドン／トランペット協奏曲 変ホ長調

F.J.ハイドン(1732-1809)は、古典派を代表するオーストリアの作曲家である。この曲の誕生のきっかけとなったのが有鍵式トランペットの開発だ。以前は自然倍音しか演奏出来なかったが、複数箇所にて設けられたトーンホールを開閉することで半音階的なスケールを演奏出来るようになった。その楽器をアントン・ヴァイディンガー(1767-1852)が自ら改良を加えその発明品の発表の為、ハイドンに作曲を依頼した。やがてヴァルブ式トランペットの登場によってすぐに表舞台から姿を消してしまうことになるが、当時において非常に画期的な発明であり、今日においてもこの協奏曲はトランペット奏者にとってかけがえのないレパートリーとなっている。

～プロフィール～

兵庫県出身。岡山県私立明誠学院高等学校出身。これまでにトランペットを津堅直弘、杉本正毅、高橋敦、篠崎孝の各氏に師事。室内楽を佛坂咲千生、林辰則の各氏に師事。

～休憩～

4. 森 奈那子 (Percussion) Piano 戸崎 可梨 ミシェル・カルス／4つのインヴェンション より 1.3.4 楽章

全4楽章から成り、1.3楽章は打楽器独奏、2.4楽章はピアノ伴奏を伴う。フランスの打楽器奏者 ジャック・ドゥレクリューズに献呈されており、昨今ではコンクールの課題曲に度々指定されるなど、最も演奏される機会の多い作品のひとつである。

今回は抜粋して1.3.4楽章を演奏する。

1楽章 複数の小物楽器から怪しげに始まり、やがてヴィブラフォンの速い音型やゆったりとした美しいメロディへと移り変わる。

3楽章 スネアドラムをフューチャーしたマルチパーカッションの楽章。

4楽章 5台のペダルティンパニを使用する。ピアノとの激しいアンサンブルが特徴的である。

～プロフィール～

8歳より打楽器を始める。2018年度、2019年度、2020年度 実技試験において最優秀賞を受賞。2020年、コンチェルトのタベソリストに選抜され、洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団と共演。これまでに打楽器を篠塚裕美子、渡邊弥生、石井喜久子に師事。

5. 黒澤 望愛 (Saxophone) Piano 原田 愛 アレクサンドル・グラズノフ／アルトサクソフォンと弦楽オーケストラのための協奏曲

アレクサンドル・グラズノフ (1865-1936)は、ロシアの音楽家である。グラズノフは人のために心を傷める人であり、当時多くのソ連国民と同じように困難な生活していても、学生のために多額の金銭や薪を惜しみなく贈る人間である。彼は、神経質な面もありそれは曲や譜面上に表れている。音楽記号が非常に細かく指示され今回の曲では、緻密にオーケストラと曲を展開していく。

今回演奏する曲は、グラズノフの晩年に書かれた曲である。譜面上では、切れ目なく演奏される単一楽章であるが大きく3つに分けることができ、それらの部分は急-緩-急の構成となる。3つ目の部分では他の部分の主題をふんだんに使用し形成されている。

今回は、この演奏会の開催と傑作を遺してくれたアレクサンドル・グラズノフに感謝し演奏する。

～プロフィール～

洗足学園音楽大学在学中。サクソフォンを10歳より始め、古舘祥枝氏に中学より師事。
大和田雅洋氏に高校より師事。

6. 谷田 果奈美 (Euphonium) Piano 岡南 健 ウラジミール・コスマ／ユーフォニアム協奏曲 より 1楽章

ウラジミール・コスマ作曲のユーフォニアム協奏曲は、1998年にフランスで開催されたコンペにて初演された曲である。作曲家のウラジミール・コスマは1940年にルーマニアに生まれ、幼少期よりヴァイオリン、作曲を学び、パリに渡り多ジャンルの音楽を勉強し、それらを織り交ぜ独自のサウンドを作り出した。

今回は3つの楽章からなる協奏曲より抜粋し第1楽章 Allegro assai を演奏する。スペインの特徴的なリズムとメロディーを使った、テンポが非常に速く、曲が進むにつれて音符も多くなり目まぐるしく進んでいく曲だ。この様な魅力的な協奏曲は、ミシェル・ルグランの影響を受け、映画音楽などを作ったコスマならではの曲だ。

～プロフィール～

栃木県出身。作新学院高等学校出身。2021年第3回日本奏楽コンクール管楽器部門 審査員特別賞。
これまでにユーフォニアムを福田昌範氏に師事。室内楽を渡辺功、林辰則の各氏に師事。

7. 船木 彩香 (Saxophone) Piano 柳川 瑞季 フェルナンド・デュクリュック／ソナタ嬰ハ調

フェルナンド・デュクリュック(1896-1954)はフランスのオルガン奏者、作曲家。パリ音楽院にてフーガ、和声、伴奏の各科で一等賞を得た彼女は、即興演奏に優れたオルガニストとして名声を博し、作曲と教育の分野にも業績を残した。

《ソナタ嬰ハ調》は1943年の所産で、マルセル・ミュールに捧げられた。第1楽章ではソナタ形式、第4楽章ではロンド形式を用いている。しかし、Noel(クリスマス)という副題が添えられた第2楽章は、冒頭の旋律で15世紀頃のフランスのクリスマス・キャロルを用いたり、3楽章の Fileuse(糸を紡ぐ女)で奏でられる6連符の пассаージュが、フォーレ作曲の音楽劇《ペリアスとメリザンド》の中で演奏される同名の作品と酷似していたりと、彼女がパリ音楽院在学中に得た影響が非常に大きい楽曲となっている。

～プロフィール～

東京都出身。私立京華女子高等学校卒業。12歳よりサクソフォンを始める。

これまでにサクソフォンを東秀樹、故原博巳、本堂誠の各氏に師事。室内楽を本堂誠、江川良子、大和田雅洋の各氏に師事。声楽を鶴飼文子氏に師事。作曲を柳川瑞季氏に師事。現在、洗足学園音楽大学に在学。